

空手道で一番苦しかったこと

平成 30 年 10 月 20 日 初段受験

西東京浜田山支部

利根川 亜己

アーナクターで斜め 45° に飛び込み後ろ足の爪先は正面を向けると習った時、あっ、これダメなヤツだとすぐにわかった。私は車庫入れが苦手なのだ。タイヤがどっちをどの程度向いているのか目視しないとわからない。自分の身体にも関わらず位置関係や力加減を感知出来ない。固有感覚が人より劣っているのだ。そのため持ち前のしつこさで反復練習しまくったところで一向に不自然な動きが直らず、努力の方向が間違っているとわれ、がんばってるのにね...と周りに気をつかわせてしまう。不得意なことばかり続けていると自分が何も出来ない人間になった気がして惨めになる。アーナクターでつまずいてから、苦しい闇の期間はかなり長かった。

転機が訪れたのは初めて出場した全国大会。ついに剛を煮やしたのか、型の一挙手一投足まで本部長自らの指導が入るようになった。直さなくてもいい箇所はないほどだったが、とにかく言われたとおりの場所に拳、手刀、つま先を「置きに行く」ように動きを修正していくうちに、今までの答え合わせができたような気がして始めて練習に手応えを感じた。また、補欠だが組手の団体戦にエントリーされたことで、互いに応援しあったり、共に練習をするありがたみや喜びを強く感じるようになり、モチベーションが上がった。

初段受験に際し練習量が一定ラインを超えたあたりで気づきがあった。

一つは細かいミスが多少は感覚でわかるようになった事。神経回路がつながった！ 固有感覚は鍛えることができる！ 大声で叫びたいほどの発見だった。もう一つは型と組手とそれ以外の細かい技だと思っていた事が全部つながっていると感じた件。それぞれの稽古ではなく、型で稽古をする。裁き拳法で稽古をする。そのすべてが戦いで身を守る為の術として集約していくのだと実感した。

本部長に最も感謝している点は、審査に受かる為でなく勝つ為に練習しなさい。強くなりなさいと教えて下さったことだ。及第点でいいから黒帯になりたいと思っていた私が間違っていました。支部長、副支部長をはじめ黒帯の先輩達の強いのに謙虚なところ、品の良さを尊敬している。同じ支部の人達と一緒に練習ができて楽しかったし、挫けそうな時には心の支えだった。その仲間の中には息子も含まれている。

劣等感を拗らせていた過去の自分に会えたら言ってやりたい。本部長を信じてついて行けば思ってもいない景色を見ることができるよ。それより帯が二重になっているのを一刻も早く直しなさいと。